

CeMI 気象防災支援・研究センター News Letter

Contents

1. 台風シーズンの始まり
～データから見える“真のスタート時期”
2. 土用波
～夏から秋の海岸ではご用心！
3. お天気よもやま話
～熱中症警戒アラート



1 台風シーズンの始まり

～データから見える“真のスタート時期”

大雨が心配な梅雨が終わって、いよいよ暑い夏が到来しましたが、気象の世界ではそろそろ台風シーズンが始まります。最近ではあまり耳にしなくなりましたが、昔から台風による災害への警鐘として「二百十日」や「二百二十日」といった言葉が使われてきました。

現代の暦では9月の1日と10日頃にあたります。最近では9月に限らず、10月にも大きな被害をもたらすような台風が襲来します。一昨年、2019年の10月には東日本から東北地方に大きな被害を与えた東日本台風が襲いました。やはり台風シーズンは9月を中心とした期間ではありますが、過去の資料を調べてみると実は8月も台風の発生や襲来が多く、まさに梅雨が明けて盛夏期の訪れとともに、南海上の台風にも眼を向けなければならなくなります。

図1は気象庁で台風に関する資料が整理されるようになった1951年から2020年までの70年間の台風の月別の発生数です。発生数でみると最も

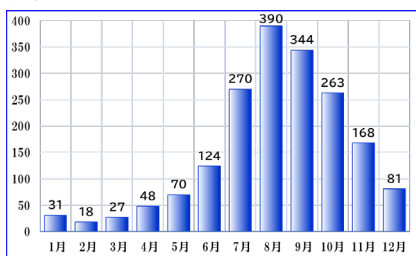


図1 月別の台風発生数
1951年から2020年までの70年間の全台風1834個

多い月は8月で、次いで9月となっています。さらに図2は70年間に日本に上陸した台風206個について、旬別〔10日間〕に上陸日を調べたものです。

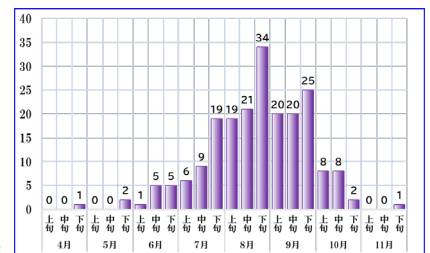


図2 旬別の台風上陸数
1951年から2020年までの70年間の上陸台風206個

断然多いのがなんと8月下旬です。次のピークは9月下旬で「二百十日」や「二百二十日」の頃にあたる9月上旬や中旬はむしろやや少なくなっています。図2からはやはり梅雨が明けたあとの7月下旬頃からは台風シーズンが始まるといっても良さそうです。ただ、8月上旬から中旬にかけては太平洋高気圧が日本付近を広く覆うことが多く、台風も日本に接近、上陸することは容易ではありません。台風にとって太平洋高気圧は大きな厚い壁のような存在です。したがって太平洋高気圧の勢力が強い間は台風の心配は不要ですが、高気圧は一般に1週間あるいは10日程度で勢力を強めたり弱めたりするため、太平洋高気圧の勢力が後退した時期を見計らって台風が日本を窺うようになります。

近年、予報精度が向上している台風予報を効果的に活用して、台風に備えたいものです。



2 土用波 ～夏から秋の海岸ではご用心！

立秋前の18日間の夏の土用のころに、遠くの海洋上にある台風から伝わってくる波が土用波です。海面の上を風が吹くと、摩擦によって海水が波打つようになります。風が強ければ強いほど、また吹き続ける時間が長いほど波が成長して高くなっていきます。台風のように非常に強い風が吹けば、波の高さは10メートルを超えるようなこともあります。



このように風によって起こされる波が「風浪」と呼ばれるものです。一方、土用波と呼ばれるものは「うねり」として風浪とは区別されています。

梅雨が明けて盛夏期が訪れるころ、日本のはるか南海上では台風が次々に生まれ、中には発達して高い波を引き起こすものも現れます。このような台風が引き起こし

た波がはるばると伝わってきたものがうねりであり、土用の頃のうねりを「土用波」と呼んでいます。

土用波という言葉は俳句では夏の季語としてしばしば登場しますが、防災上は危険な面を持っています。

土用波の特徴は、遠く離れた海面から伝わってくるため、海岸では風も弱く、良く晴れて穏やかであっても高い波が押し寄せてくることです。また、海岸の複雑な地形の所や水深が浅くなる場所で波が高くなりやすい性質を持っています。台風が近づいていたり、風が強ければ波に対しても注意が向きますが、穏やかな天気の中での海水浴や海釣りでは波への注意がおろそかになることがあります。また、うねりは風による風浪とは異なり、長い周期でゆっくり伝わる波のため、波頭はなめらかで海岸近くにくるまでは高いうねりとして危険を感じ取ることが困難です。時として風浪とうねりの山が重なると思わぬ高さの波として打ち寄せることもあります。夏の海岸ではこのうねりによる水難事故も毎年のように繰り返し起こっています。夏から秋にかけての海岸でのレジャーでは、出かける前に必ず天気図などで南の海上に台風がないか、あるいは天気予報で海上の波の様子を確かめるなどして、安全を心がけてください。

3 お天気よもやま話 ～熱中症警戒アラート



令和3年4月から、全国で提供開始された「熱中症警戒アラート」。熱中症の危険性が極めて高くなると予想される日の前日夕方または当日早朝に都道府県ごとに発表されます。その発表基準となっているのが暑さ指数(WBGT/湿球黒球温度)。暑さ指数の単位は気温と同じ℃ですが、気温だけでなく、人間の熱バランスに影響の大きい湿度、輻射(ふくしゃ)熱、それに風といった要素も考慮した数値です。そのため、気温よりも暑さ指数の方が、熱中症対策の参考になるのです。

暑さ指数が28を超えると熱中症にかかる人が急増する「厳重警戒」、31以上で「危険」という状態。暑さ指数が33以上ともなると「かなり危険」になり、熱中症警戒アラートが発表されます。環境省と気象庁によって発表されていますので、どちらのホームページでも確認できますが、ここでは環境省ポータルサイトのコードを記載します。

環境省熱中症予防情報サイト



この数年、熱中症で救急搬送された人の約半数を占めるのは65歳以上の高齢者(下図)。高齢者は暑さや水分不足に対する感覚や、体温調節機能が低下しており、のどが渇いたと感じる前の水分摂取が大切とされています。ただ、高齢者は腎機能も低下しているため、一気に大量の水分を摂ると、却って体の負担に。そこで推奨されているのがこまめな水分補給と、しっかり食事をとることです。食事で摂れる水分は、腎臓に負担をかけずに自然と摂取できる貴重な水分なのです。ご高齢の方には、熱中症対策として「しっかり食べることもおすすめください。

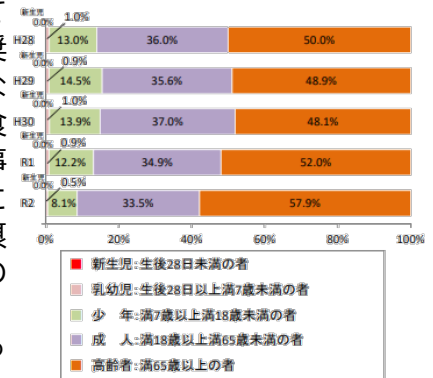


図: 熱中症による救急搬送状況(平成28年～令和2年) 年齢区分別(構成比) (出典: 消防庁報道資料)



掲載内容へのご意見、その他サービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

03-3359-7971

03-3359-7987

advisory@npo-cemi.com

